

グローバル人材の育成について

スポーツ選手として見てきた“世界”について、私見を述べさせて頂きたいと思います。

教育再生実行本部が政府に提出した報告書で、大学入試試験にTOEFL活用の方針が示されましたが、これを機に語学教育のあり方が議論されていくことは大いに歓迎されるべきであると思います。自身の学生時代を振り返った時、やらざるを得ない形の英語の勉強であっても、脳が吸収しやすい時期に徹底的にやっておくべきだったと思っています。しかし、同時に単純にTOEFLの点数を取るためだけの学習内容にならないように配慮する必要があると思います。コミュニケーションの背後にある『違う文化や宗教、思想を持った人の中で日本人として何を発信するのか?』という、“全体の中の個”として、広い視野を持って物事を捉えている人、それが真のグローバルな人材であると思います。

私自身の経験の中で、国際人としての意識に欠けていたと痛感させられる出来事がありました。

事例1：先日、アメリカ・ボストンで爆破テロが起きましたが、同じくスポーツイベントの場であった1996年のアトランタオリンピック期間中にも、セントラルパーク内のごみ箱に爆発物が仕掛けられるというテロが起こったことがありました。その影響で、競技会場から選手村に戻って来る度にかかなり厳重な手荷物検査が行われ、セキュリティーチェックエリアには常に選手・コーチ達が列を作り、私達もそこに並んで時間を費やした記憶があります。選手村の部屋に設置されていたテレビでもニュースが連日流れていたものでその事実は知ってはいたのですが、“競技に集中する”ということ都合のいい理由にして対岸の火事のような感覚でその事件を捉えていました。ところがシンクロ競技のチーム演技直後、海外のメディアから、このテロについての質問をチームメイトが受けたのです。演技直後には演技の出来などの感想や、次に向けての抱負を聞かれるものだと思っていたので、その時その選手は用意になかった質問に対して答えられませんでした。それをすぐ背後で見ていた私は「自分だったら何て答えただろう？咄嗟に、日本という国の文化を理解した上での見解を話すことができたでしょうか？」と思った訳です。ましてや英語は片言しか話せず、自分の考えを表現することなど到底できない語学力でした。“日本代表”とは専門競技の代表というだけでなく、文字通り、日本の代表として世界から見られていることをその時改めて認識しました。このように気づける機会を得たことは幸運であったと思います。では、機会がない人は一生気づくことがないまま過ごすのでしょうか。グローバルな視野を持つ人材を多く育てるには、大前提として日本社会全体がこの視点を当たり前に意識できている必要があります。日本人のルーツやアイデンティティとは何なのか？をテーマに、日常の中で大人達が会話をし再認識することや、世界の宗教や文化に関

心を持ち、それに対しての日本との違いを考え、賛同せずとも知ることを楽しむ。大人の意識が子供に反映されることはいうまでもありません。

事例2：スペインのトップ選手達と共に世界選手権に向けてのトレーニングキャンプをした際のこと。この時、日本人の表現力の乏しさを感じたと同時に、日本人の物事を仕上げの完成度の高さを認識する機会がありました。

世界選手権がバルセロナで開催されるため、前年冬に現地のプールの視察と、私達のコーチがスペインから同調性を高めるための技術指導を依頼され、その二つを兼ねて数日間スペインで海外合宿を行いました。それぞれのチームがちょうどプログラムの振り付けを行う時期であり、そのプロセスが全く違うことが特に印象に残っているのですが、例えばスペインの選手達は事前の打ち合わせをせず、練習開始頃にポツポツと現れ、いきなり水中で使用曲をかけて即興で感じるままに動き始めます。そしてプールサイドで観ているコーチ、あるいはチームメンバーがその中の見栄えのいい動きを採用していきます。自分のアイデアを採用してもらいたいがために次々に新しい動きをして見せアピールします。そして動きを採用された選手はガッツポーズで喜びをあらわします。一方、私達日本人選手は、トレーニング開始時間前に早く集まり、振り付けをそれぞれの頭で考えてからそれが実際にできる動きかどうかを話し合い、共有します。そして皆で考えたその動きがコーチのイメージと合致しているものを採用していきます。そんな違いがある中、振り付けと一緒に付けることになり、スペイン人選手に交じって彼女達と同じ方式で私達も即興で好きに動くように求められました。私を含め日本人選手は、「上手く動けなかったら恥ずかしい」という心理が働くのか、即興で動くことに大変躊躇しました。スペインの選手からは、「もっと心を開放して、振り付けを楽しめばいいのに」と言われたのが私達が最も記憶に残ったことです。文化の違いが大きく出た事例だと思えます。スペインは一瞬一瞬の感性を大切にすることで、動きがダイナミックで情熱的な表現力が特徴ですが、当時は技のキメが粗いことが課題とされていました。日本は振り付けが決定した段階でタイミングや角度が既に高いレベルで揃っており、あとは持ち味の同調性や正確な技術を徹底して磨いていくという手法でした。派手やかさはヨーロッパや欧米の選手が得意でしたが、『楚々としながらも芯は鋼のように固く、正確』ということが私達シンクロ日本の信条でしたが、戦う上で十分な武器として世界に向かっていた自負があります。ビジネスのシーンに置き換えるとまさに同じことが言えるのではないのでしょうか。今後子供達が世界に出て、世界の強豪と渡り合うとき、躊躇せず瞬発力のある発言やアイデアを出せなければなりません。賛同を得るために、時には人に伝える情熱的な表現力も必要です。日本人が苦手としていた部分を超越していくためには、子供の頃からこのようなグローバルな視点を意識した環境にいかによく接することができるかが鍵だと思います。高い技術、勤勉な国民性はそのまま私達の誇りにして、両面を兼ね備えていくことが理想ではないのでしょうか。

上記を踏まえて、さらに具体的な私見を述べさせていただきます。

- 留学に対して、親世代がネガティブ→準備の大変さや費用、受け入れ先、現地の治安など不安材料。同志社のラーニングコモンズでは、留学を希望する学生の為の相談エリア（建物内の空間のどこからでも見える場所）があった。専門の留学カウンセラーがいて相談に乗ってくれることや、またはその様子を日常的に学生が目に見えるのは、これまで留学に対して感じていた敷居の高さが取り払われ非常に良かった。留学費用の奨学金制度についても同時に相談できる。
- 学生が留学をしても単なる語学を習得する目的が多い（大学に行くにしても、その前に数カ月語学学校に行ってからというケースが未だ多い。）→留学前までに実践的なレベルまで語学を磨けるような授業展開が必要。幼児教育の段階からネイティブの発音に接する。参考までに都内にネイティブの先生による英語しか使わない、などの取り組みをしている幼稚園が既にある。同じ留学をするなら、その語学力を活用して踏み込んだ授業内容を修得することが重要。
- 留学してまず日本人がぶつかる壁が「自分の意見が言えない」ということ。（自分の意見がないと思われると、付き合っても面白くないとされ徐々にコミュニケーションの輪から外れていく。そのような経験談を多く聞く。）→自分の意見を言う素地がない。素地を作るには、どの科目に関しても初等教育の段階から持論を話す場がある授業を設けるべき。教科書にも問いかける項目を増やす。例えば社会、歴史。年号の暗記だけでなく、なぜその出来事が起こったのか背景を考えさせる。手を上げて単純に解答だけを発言させるのではなく、なぜその答えに至ったのかまでを一人ずつが話せるように。自分のアイデアや考えを言うことに喜びを持たせる。

各世代に講演をする機会があるがその際に受ける印象。質問をした時の反応。
発言の変化：小学生までは活発に手が上がるが、中学生からは極端に少なくなり、高校生も消極的。（部活など、何か打ち込めるものを持っている生徒からは手が上がる。自信や自己肯定感の高さに関わってくるのでは？）大学生からは少し増えるが、情報の吸収にまだ食欲ではない。社会人から急変。手が上がりはじめる。吸収しようという意志が明確に。しかし、スタートが遅いのでは？世界ではティーンエイジがこのレベルの発言ができていて→各世代の時期に合った発言しやすい雰囲気作りや質問内容を意識する必要がある。特に中学生は「変に目立って周りから浮きたくない」という心理が働くので、何かを率先して発信できる人間の方がカッコよく、生き方としても面白いということを伝える。
- 大学では『あの教授の授業が面白い！』という情報より『あの教授は単位が取りやすい』という情報がまわる。→学生が主体的に目的を持って授業を受けていない。一方

で教える側も、グローバルな視点を意識し、学生への問いかけ方や授業内容、試験の評価の仕方などを工夫する。（ラーニングコモンズの有効活用も、教授の授業内容に関わるのではないか？）指導者と生徒はお互いの才能が共に共鳴し合うことで、はじめて世界トップへの挑戦があると思う。

- 留学生の受け入れ態勢を整える→留学生を受け入れを進めている大学は多くなってはいるが、その留学生と日常的に交流を持っている学生は一部である。異文化を知るには日々の交流が重要。優秀な留学生の受け入れをさらに促進させるために、寮、学費、など、壁となる部分の環境整備を考える。

最後に。上記と重複する部分がありますが、大学は、幼児期、小、中、高で学んだことの編集作業をする場所であるべきだと考えます。膨大な暗記量を必要とする受験勉強で精魂共に疲れ果てて入ってきた大学で、いきなり「グローバル化を進めていくからグローバルな視点で、流暢な英語を使って意見を言え！」と言われても、その素地がない子供達には無理なオーダーです。まず、今後進んで行くべき大学の位置づけを日本社会に周知徹底し、小、中、高の間にもっと考えを議論するという機会や、“全体と個”を考えさせる授業の展開、世界の多種多様な文化と日本の文化の共通と違い、さらに教える側が表現力豊かに言葉を発しながら、素地を作る環境を整え、大学ではそれまでインプットしてきた膨大なデータを編集し、実践的に活用するという作業に進んでいく。具体的には即戦力になるプレゼンの仕方や、発信の仕方を大学のうちに多く経験を積むことが理想です。入学試験のあり方も変わって行かざるを得ないと思います。想像力、表現力、さらに自分という人間が考えていることを的確にまとめることができる能力を、試験の評価対象になれば、小・中・高の授業の内容も変わっていくであろうと思います。私は大学改革も必要ですがこの以前の教育に個人的には重要性を感じています。